

8212 さあ、いよいよ結婚と決まったとき、・・・

さあ、いよいよ結婚と決まったとき、男はなのを考えるものか、その本音の部分を若い娘さんたちは知っているだろうか。

もちろん喜びの感情がある。思わず知らず頬が弛むほどの歓喜である。

しかし、それとはべつに男は、

“しまった”

と思う。

けっしてその結婚を望んでいないわけではない。それでも、男はやっぱり“しまった”と思う。

阿刀田 高『ナポレオン狂』

[許容訳例]

When he finally gets engaged, what does a man think? Do young women really know his underlying feelings?

Of course, he has a feeling of pleasure, the kind of joy that makes him smile unconsciously.

But apart from this, he is also saying to himself, “That’s done it!”

It is not that he does not want the marriage. Yet still he has that sense of having made a mistake.

[翻訳例]

When it finally comes to getting married, what does a man really think? Are young women aware of the private, unspoken side of his feelings?

There is a feeling of pleasure, of course, the kind of joy that will make him unconsciously break into smiles.

Even so, there is something else too: a feeling of having committed an inevitable error.

In no sense does this mean that he doesn’t desire the marriage. Yet still he has that feeling of having made some mistake.

■さあ、いよいよ結婚と決まったとき、男はなのを考えるものか、(8212)

★「さあ」は「いよいよ結婚が決まったとき」の緊張感を出すために加えられたもので、英語では「いよいよ結婚と決まったとき」の表現の中に組み込むしかないでしょう。

★「いよいよ」は、finally でいいです。at last でも間違いではありませんが、これは普通「ようやく、やっと」の意味で使うので、ここではちょっと違うように思われます。

★「結婚と決まったとき」は「さあ、いよいよ」という緊張感も含めると、日常的によく使われる when it comes to something[doing]がいいでしょう。このイディオムの用例はマケーレブ・岩垣共著『英和イディオム完全対訳辞典』にかなり出ていますが、たとえば、When it comes to making a speech, I'm the worst there is. (スピーチをするということになると、

ぼくは最低もいいとこだ) のように使います。ここでは when it comes to getting married です。なお、when の代わりに at the time (「その時」を強調する時に使う) を使う必要はないでしょう。それから、「結婚が決まる」を the marriage is decided とすると、結婚の日取りまで決まったという感じになります。ここでは使わない方がいいでしょう。

★「男はなのを考えるものか」は、文意の流れからすると、「その男は何を考えるものか」となって What does the man (really) think? [何となく really を入れたくなります] となり、「結婚する二人のうちの男の方」という意味で the man でいいのですが、ここで the man を使うと、次の文の「若い娘さんたち」(一般論) が出てくるので、「特定の男の人」と続きません。そういう意味で、ここは a man とする方がまだ一般的という感じが出ていいと思います。もちろん、the man でも一般的とは言えますが、その中でも限られた男の人という感じになってしまいます。

■その本音の部分を若い娘さんたちは知っているだろうか。(8212)

★「その本音(の部分)」の「本音」にもいろいろあって、辞書には one's true[real] intention/ one's real feelings が出ていますが、「本音を吐く」は express one's real feelings で、ここでは his [a man's] real feelings ということになりますが、real の他に underlying/ innermost/ unspoken などを使ってもいいでしょう。

★「(その本音)の部分」が難しいです。省略して訳す [意訳する] こともできますが、英語としておかしくなく、しかも日本文に近い文章にしたい [これが「翻訳」というものなのですが] のなら part とか side を使って the private, unspoken side [part] of his [a man's] feelings でしょう。なお、「その」は the です。this にすると、「本音の部分」が「男の考えるもののすべて」にかかかってしまいます。

★「若い娘さんたち」は、結婚の対象になるくらいの年頃の若い娘ですから young women です。

★「知っている」は know/ be aware of でしょう。

★「だろうか」は場合によっては one wonders を挿入して。Do young women, one wonders, know…? とすることも出来ますが、ここではちょっとオーバーになりますから、不要でしょう。

■もちろん喜びの感情がある。(8212)

★「もちろん」は of course です。位置は文頭でも文末でいいです。

★「喜びの感情がある」は There is a feeling of pleasure.とか he has a feeling of pleasure.です。「喜び」に delight は、joy に近く、ここではちょっと強すぎる感じがします。それに、次の文に「歓喜」とありますから、ここは控えめな pleasure がいいです。

■思わず知らず頬が弛むほどの歓喜である。(8212)

★「思わず知らず」は unconsciously です。辞書には in spite of oneself も出ていますが、この表現は「自分でも何か抵抗感を感じていて、それを抑えたいと思っているにも関わらずどうしても出てしまった」という感じで使います。つまり、「誰かと一緒にいて自分が喜んで

いることを知られては困る」というような場合でしたら、ここで *in spite of himself* を使つてもかまいませが、ここは必ずしもそうではないと思うのです。

★「頬が弛む」は、英語的には「頬を弛ませる（ほどの）（歓喜）」です。(*joy that*) makes [will make] him smile (to himself)か、あるいは(*joy that*) makes [will make] him break into smiles でしょう。

★「歓喜」は *joy* です。

●〔ほどの〕（連体修飾節との組み合わせ）(such a… that/ the kind of … that)

「思わず知らず頬が弛むほどの歓喜」は、「思わず知らず頬が弛む歓喜」という「連体修飾節（思わず知らず頬が弛む）+ 不定代名詞的体言（歓喜）」ですから「名詞(joy)+関係詞節(that….)」で処理できるのですが、[関係性指標] が〔ほどの〕なので工夫が必要です。すぐ思い浮かぶのは such a joy that…ですが、これでつなぐと、この文章を書いている本人の気持ちまで入るような感じがします。つまり、書いている本人がその *joy* を知っていて「ほらあの歓喜」という共犯意識が強く出てしまうことになるのです。そういう筆者の主観的情感を払拭するために、ここは the kind of joy that…とした方がいいと思われます。

■しかし、それとはべつに男は、“しまった”と思う。(8212)

●〔しかし〕 (=それでも)

「しかし」は *but* でもいいですが、ここは単なる「逆接」ではなく、前文の内容を認めながら「それでも・でも・しかし」(e.g. “They say the magazine is popular with men too.” “Even so, the overwhelming majority of readers are female, aren’t they”)（最新和英口語辞典・朝日出版社）と言っているのですから even so の方がいいと思われます。

★「それとはべつに」は *apart from this* ですが、喜ぶと同時に「しまった」とも思うのですから、その内容に合わせてもう少し英語らしい表現にするとすれば、*at the same time* とするか、*there is something else (too)* とすればいいと思います。

●直接話法を地の文に入れないと

「男は、“しまった”と思う」は、この書き方に合わせる *he is saying to himself, “…”* となります。そして、「“しまった”」に相当する英語は “That’s done it.” でしょう。これは何か取り返しのつかないようなことをした場合に使います。Oops という言葉もありますが、これは何かを落としてしまったときとか、つまずいたときとかに使います。ここではちょっと無理なようです。ところで、いつも言っているように、英語では地の文に直接話法を混ぜないのが普通ですから、内容を間接話法で表さなければなりません。ここを間接話法で書くとしたら *But at the same time he has a feeling of having committed some [an] irrevocable error.* のようになります。それから *there is something else (too)* を使うなら、*something* がすなわち *a feeling of having committed some [an] irrevocable error* なのですから、*there is something else too: a feeling of having committed some [an] irrevocable error* とコロンでつなぐといいです。

■けっしてその結婚を望んでいないわけではない。(8212)

★「けっして・・・わけではない」には、覚えておいた方がいい英語の表現があります。In no sense does it[this] mean that…で、大抵の場合に使えます。「決して・・・でない」の訳として in no sense/ not in any sense は非常に訳に立ちます。この場合、mean that…を使うことでことさら in no sense を使いたくなるのかもしれません。あるいは、ここでは It is not in any sense that…と言う形でも使えます。It is not at all that…でも意味はよくわかりますあまり使わない表現です。

★「その結婚を望んでいない」は he does not want the marriage とか、he doesn't want to get married でいいですが、want より desire が一番ぴったりではないかと思います。ついでですが、he doesn't expect the marriage は駄目です。expect を使う場合、前提として「当然のこととして」という感じがあると思います。たとえば、I expect you to work hard.の場合、「当然よく勉強してくれるだろう」という期待感が込められていて、むしろ命令に近い言い方になります。‘何か根拠があって・・・’という感じで、その根拠が場合によっては‘自分が観察した事実に基づいて’ということにもなるのです。I wasn't expecting that.（そんなことになるとは思わなかった）というように使います。ですから、自分の結婚ではなく人の結婚についてなら I didn't expect the marriage.と言えます。つまり、この場合は「あの二人が結婚するとは思っていなかった」という意味にあるわけです。ここでは expect は使えないと言つていいでしょう。

■それでも、男はやっぱり“しまった”と思う。(8212)

★「それでも」は「それでも（しかし）」なら but; even so でしょうし、「それでも（なお）」なら still; (and) yet でしょう。次の文の「やっぱり」と組み合わせて Even so he still…とか Yet still he…とするといいです。

★「男は“しまった”と思う」は、直接話法にしないで、上の some [an] irrevocable error を受けて feels that sense of having made some mistake [having erred] とするか。あるいは feels that sense of error としてもいいかもしれません。